
君との生活

大和伊織

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君との生活

【Nコード】

N5993S

【作者名】

大和伊織

【あらすじ】

生活を少し変えようと思った。毎日起きて、会社に行って、家に帰って、寝て、また起きて、その繰り返しの日々を、少しでも変えたいと思っただけだ。家具を増やしたり変えたりするだけでは物足りない。部屋の中を見渡し、我ながら奇抜な考えが浮かんだ。そうだ、家族を増やしてみようか。

別に特に理由などない。ただ生活を少し変えようと思った。毎日起きて、会社に行って、家に帰って、寝て、また起きて、その繰り返しを、少しでも変えたいと思ったただけだ。家具を増やしたり変えたりするだけでは物足りない。部屋の中を見渡し、我ながら奇抜な考えが浮かんだ。そうだ、家族を増やしてみようか。

しかしいざ家族を増やすとなっても難しい問題だった。女は論外だ、やかましくて生活が一変するどころかどん底になる。かといって男はもつと御免だ。いい年こいて学生のような真似事をしてどうする。家族でも呼ぶか、静かすぎる母と、黙らない父から解放されて早10年、何を今更。ペットはもつと駄目だ。さんざん迷惑をかけるあの様に、癒しを感じる人の神経が理解できない。

さてどうしたものか何となく雨の街を歩いてみた。答えは見つからず、行き詰ってしまった。とりあえずカーテンでも替えてみるかな、大あくびしながら大型量販店に入ろうとしたそのときだった。箱の中に入り、虚ろにこちらを見つめてくる目と目が合った。最初は捨て犬か何かだと思ったが、驚いたことに少女だった。通りすぎる人々は、ある者は同情するだけして声もかけず、ある者は大笑いしながら携帯のカメラ機能を連射していた。

俺はその子を見下ろした。どちらかといえば可愛い部類に入るかもしれないが、目に生気がなく、口は妙に半開きで、服もぼろぼろだ。お世辞にも可愛いと声をかけられない。俺はしばらくその子と見詰め合った。虐待され続けた拳句に捨てられたかもしれない。

そうだこの子にしよう。俺はその子の手を取り、カーテンを買わず、そのまま家へ帰った。彼女は何も言わずについてきた。

妙な疑いをかけられてはたまらない、一応警察には連絡した。一

週間くらい経っただろうか、結局身元は分からず、搜索願いもなく、このままでは施設に送ることになるという連絡だった。予想通りといえば予想通りだった。俺が善人ぶって引き取ります、と言った。そうですか、と警官と名乗った男は微笑んでいたが、その目は妙に厭らしかった。俺が性的虐待を試みてるところでも想像したのだろうか。

残念、俺にはそんな趣味はない。正直同世代の女を抱いても楽しいと思っただけではない。

ペットを飼った経験はあまりないが、彼女は恐らくそれとそれほど変わらないだろう。何でも食べ、何でも飲み、何でも着る。虐待の影響からか、元からそうだったか定かではないが、彼女は口を利かない。静かなのはいいことだ、俺はその少女を割と気に入った。ペットであれ何であれ名前がないのは不便だ、何がいいだろうと俺が呑気に名前辞典を見ていると、後ろから彼女の気配がした。

「おじさん」

驚いた、しゃべれるのか。俺が振り返ると彼女は何だか泣きそうな顔をしていた。

「私を叩かないの？」

そうかやはり虐待されていたのか、俺は一人で納得した。叩かないよ、と俺が答えると、彼女が笑った。欠けた歯が何本も見えた。

「帰りたいか？」

そう聞くと、彼女は頭が落ちるんじゃないかと心配するほど首を横に振った。俺が思わず笑ってしまうと、彼女も笑った。その夜は俺が眠ると、彼女も同じ布団の中へ入ってきた。構わないから好きにさせた。人と寝たのはずいぶん久しぶりだった。

翌朝、彼女はいなかった。視線だけで探すと、彼女は部屋の隅にいた。膝を抱き、頭を伏せ、小刻みに震えていた。俺が声をかけようとすると、彼女は更に姿勢を低くした。

「叩かないで」

俺は驚いた。叩かないよ、と声をかけると、彼女はこちらを見るが、まだ怯えていた。虐待の傷は予想以上に深いらしい。思っていたより面倒な拾い物をしたな、どうする元いた場所に返すか、などと迷っていると、次に少女は信じられないことを口にした。

「おじさんは誰？」

俺が思わず凝視すると、彼女はもつと怯えた。

「君を昨日拾った者だよ」

「…嘘…昨日も、叩かれたもん。パパから叩かれたもん」

彼女があまりに怯えるため、俺はもう、彼女に声をかける気にもならなかった。

また夜になった。彼女は俺に少しは心を開いたのか、また与えては何でも食べ始めた。腹が膨れたら、今度は眠ってしまった。ようやく寝てくれたかと俺も寝支度をする、彼女がまた入ってきた。

そして翌朝、また子猫のように震えながら、彼女が言った。

「おじさん、誰？」

翌日も、その翌日も、彼女は俺に怯え、そしてまた懷いていった。毎日毎日はじめまして状態が続く。最初は物珍しさで何とか耐えられたが、いい加減苛立ってきた。毎日毎日世話をしているのに、毎日毎日はじめましてではたまらない。

そういうことに詳しそうな知人に連絡を取ってみると、そういう病例は確かに存在するという。一日しか記憶を保てない病気が。虐待の影響かもしれないし、あるいはそれが原因で虐待されたかもしれない。

なるほど、他人が数日で腹が立てるのだから、実の親が数年面倒を見て毎日はじめましてでは、俺が今まで経験したことないくらいの怒りが生じるだろ。やはりもう捨ててしまおうか、俺が彼女を見た。彼女は怯えている。こつも毎日だと、こちらも少しは対応に慣れてきた。

「叩かないよ」

俺がそう言っていると、彼女の震えは少し止まる。やれやれ、俺が煙草に火をつけようとすると、失敗した。

毎日毎日記憶がリセットされているのに、叩かれたことだけは覚えていいるのか。それほどまでに、強烈に染み付いているのか。

同情よりも、嫉妬が勝った。俺のことは毎日はじめましてでも、叩かれることだけは忘れない。その記憶の強さに俺は嫉妬していた。このまま捨てては、あまりにも癪だ。いつか、彼女が俺を認識することが出来たら、そこで初めて俺はその記憶に勝てる。

その日から俺はその子の父親になることにした。毎日怯えられようが、俺は強引に彼女を愛した。美味しいものを食べさせ、可愛い服を買ってやり、休みの日はらしくもなく買い物や遊園地に連れていった。知らない男から必要以上の物を与えられ、色んなところへ連れ回され、彼女は毎朝怯えていたが、夕方には笑っていた。声を上げて、笑っていた。

そうして半月ほど経っただろうか、彼女は起き上がり、こちらを見て、なんと笑っていた。

「おはよう、パパ」

「おはよう」

記憶に勝った瞬間だった。俺は彼女に見えないように、小さくガツツポーズした。

「パパ早く、ヒーローショー始まっちゃう」

「今行くよ」

あれからどのくらい経っただろう。ぎこちなくではあるが、彼女は俺をパパと慕い、もう怯えなくなった。急かすお姫様の声を聞きながら、布団だけは干させてくれと笑い返した。これだけ晴れる日はめったにないのだ。

ついでに彼女の布団も干そうと持ち上げたその時だった。枕の裏

から、画用紙が出てきた。それはどうやら、俺の似顔絵のようだった。らしくもなく嬉しくなり、そつと裏返して元に戻そうとしたら、手が止まった。

画用紙の裏には、彼女の字でこう書いてあった。

パパだよ

たたかないよ

だいじょうぶだよ

そうか、と俺は静かに理解した。彼女の記憶に俺は染みついていたのだ。彼女は毎日毎日俺を忘れ、その度にこれを見ていたのだろう。彼女はどこかで知っていたんだ、自分の病氣のこと。そして、この気まますぎる勝手な父親の偽物のことを。

彼女は俺を愛するしかない。もう帰るところなどないのだから。そして俺もまた、これに気づいたところで、彼女を手放す選択肢はもうない。

病氣なのは、どっちだ。

「パパ、どうしたの？」

「なんでもないよ。行こう」

「うん！」

いつか君に話せたらいい。

君の記憶が毎日リセットするのを悪いように利用して、毎週同じヒーローショーに連れていったこと。

そしてこの下手くそな似顔絵のお礼は、いつ言わせてくれるのだらう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5993s/>

君との生活

2011年10月7日17時43分発行